

カケス（カラス科） 全長33センチ

昭和15年に発行された、野鳥研究家・仁部富之助著『野の鳥の生態』は、時代を経ても評価が高く、昭和54年には復刻版が発売されるほどでした。観察の仕方や着眼点、記録の正確さと分類方法等々、現在も規範とすべき内容の多さには驚かされます。

復刻版「野の鳥の生態V・カケスの道すじ」の項目では、昭和12年の秋、神宮寺白旗神社付近での観察記録である。



鮮やかな青い次列風切り羽は、カラスの仲間とは思えないほどです。

私も仁部氏が観察した同じ季節、同じ場所に立ち、カケスの行動を眺めてみた。

待つこと数分間、カケスの集団は西方の杉林の上空から現れると頭上を横切り、神社の林の中に姿を隠した。その数ざっと数えて百羽以上、いやもっと多いと思われるが、とても数え切れない多さである。群れで行動する習性でしょう、第2団、第3団と次々に飛来しては頭上を通り過ぎていった。

まもなくすると、神社の林に潜んでいた集団が反対方向に移動し始めたのです。神社林にたむろしていた1集団が一気に南の雄物川方向を目指して飛び立つと、次々に別の集団も後を追って朝霧に吸い込まれていった。



飛ぶスピードは遅い方で、ひらひらとした感じで羽ばたきます。そのためか、猛禽類に襲われ犠牲になることも多いようだ。



栗をくわえています、貯食した場所から持ってきたのでしょうか。

ところが、何処から見ていたのか突如ハヤブサが現れたのです。凄いスピードで群れの中に突っ込んでいくと、カケスは直ぐに元の神社に引き返すもの、そのまま一目散に南に逃げ去るものなど、四方八方に散らばってしまった。



こちらは、好物のドングリをくわえています。



警戒心の強いカケスは、滅多に地上に降りることはありませんが、腹が減りエサを探していたのでしょうか。

復刻版を読み返してみると、カケスの行動は仁部氏が80年前に観察した時とほとんど同じであったのです。このことは、白旗神社周辺部の豊かな自然環境が、今日まで殆ど変わらずに残っていたからでしょう。

県内野鳥の会の仲間に訊ねても、これほどの集団移動を観察できるのはここだけであった。口コミで広まり、毎年9月中旬頃になると県内各地から鳥仲間が集まってくるようになりました。



冬になると庭にスズメの餌台を設置しているが、くず米を見つけキョロキョロしながら食べていた。



アップで見ると、ゴマ頭で目の縁が黒いので、鋭い顔つきに見えました。

神社周辺部の農村風景、河岸段丘に連なる広葉樹林帯などの自然林はいつまでも残していくべき自然財産でしょう。